

特許・知的財産分野におけるエージェント型AIプラットフォーム「Stilta」の徹底研究レポート

Gemini 3.5 Flash

知的財産(IP)市場の地殻変動とStiltaの登場背景

グローバル市場における知的財産(IP)の保護と係争は、近年きわめて高リスクな局面を迎えている。米国最高裁判所が、金融機関USAAの上告(特許適格性に関する下級審判断への不服申し立て)を棄却(不受理)したことで、PNC銀行に対する計2億2,300万ドル規模の特許侵害勝訴判決が最終的に消滅した事例¹、あるいは任天堂がポケットペアに対して提起した特許侵害訴訟の過程で、任天堂の関連出願(タッチスクリーンを用いたモンスター捕獲システム等)が特許庁(JPO)から拒絶処分を受けたとされる報道¹、さらにはAnthropicのAI学習をめぐる著者・出版社との著作権侵害訴訟において、約15億ドル規模とも言われる和解案が審理された事例¹などは、知財の有効性や適格性の判断がいかに微細な法解釈と技術仕様の差異に依存しているかを象徴している。

こうした高リスクかつ専門性の高い知的財産(IP)領域において、特許実務のワークフローを再構築すべく誕生したのが、スウェーデン・ストックホルムに拠点を置くスタートアップ、Stilta(スティルタ)である²。同社は2025年後半(一部の資金調達報道やピッチ情報によれば2025年10月頃とされる)に設立され⁴、設立からわずか約7ヶ月後の2026年5月に、大手ベンチャーキャピタルのアンドリーセン・ホロウィッツ(Andreessen Horowitz / a16z)がリードするシードラウンドで1,050万ドル(約17億円)の資金調達を完了したと発表した²。このラウンドには、著名アクセラレーターのY Combinator(YC Winter 2026バッチ)のほか、OpenAIの主要メンバー、さらにはLegoraやLovableといったリーガルテック・AI関連のオペレーターが個人投資家として参加している²。

同社の公開されたピッチ情報等によれば、創設陣は資本構成(キャップテーブル)の最適化を優先し、他社からの競合オファーを辞退し、a16zをリードインベスターに選定して提携したとされる⁶。a16zは特許業務のデジタルトランスフォーメーション(DX)を重要な市場機会と捉えており、2026年6月には特許出願支援スタートアップのFearnへの投資も表明するなど、この領域への投資を強化している⁶。Stiltaへのシード資金供給は、知財管理というレガシーな市場においてエージェント型AIがもたらす変革への期待値を高める要因となっている⁷。

創業メンバーのキャリアプロフィールと補完的シナジー

Stiltaの立ち上げは、戦略コンサルティングファームのマッキンゼー・アンド・カンパニー(McKinsey & Company)およびそのデータ解析・AI部門であるクオインタムブラック(QuantumBlack)の元同僚4人の協働に基づいている²。

- **Oskar Block**(共同創業者兼CEO): 18歳の時にスポーツベッティング向けの機械学習モデルを構築する最初の会社を設立し、その後 bootstrapped(自己資金)で別のスタートアップを立ち上げ、ARR(年間経常収益)100万ドル超、月間アクティブユーザー2万5,000人以上にまで成長させた連続起業家である²。マッキンゼー、ゴールドマン・サックス、およびスウェーデンのユニコーン企業2社での実務経験を背景に、知財管理が長らく手作業とスプレッドシートに依

存している実態に着目し、起業を決意したとされる²。

- **Oscar Adamsson**(共同創業者兼CPO): 国内数学競技会の出場実績を持つ競争数学者としてのバックグラウンドを持ち、チャルマーズ工科大学等でビジネスとAIの学位・単位を取得(UCバークレーやボッコーニ大学での単位取得を含む)²。ユニコーン企業等におけるプロダクト開発チームのリード経験や起業経験を有し、マッキンゼーでは50社以上のCEOと協働してイノベーション戦略の立案に関わったとされる²。
- **Tobias Estreen**(共同創業者): マッキンゼーのデータ解析・AI部門である「クオンタムブラック(QuantumBlack)」でリードデータサイエンティストを務め、グローバルクライアント向けのエージェント型AIシステム構築プロジェクトを率いた経験を持つ²。王立工科大学(KTH)等で物理学と機械学習を修めた連続創業者である²。
- **Petrus Werner**(共同創業者兼CTO): AWS(アマゾン・ウェブ・サービス)およびクオンタムブラックにおいて、欧州の主要機関やグローバル企業を対象とした大規模AIシステムの設計・実装を5年以上にわたり担当してきたシステムアーキテクトである²。

役職	氏名	前職・主な実績	専門領域
CEO(最高経営責任者)	Oskar Block	マッキンゼー、ゴールドマン・サックス、ユニコーン企業。連続起業家。 ²	経営戦略、事業開発、資金調達 ²
CPO(最高製品責任者)	Oscar Adamsson	マッキンゼー、ユニコーン企業のプロダクト開発リード。数学競技会出場実績。 ²	プロダクト設計、数学・AI、ユーザー体験 ²
Co-founder(共同創業者)	Tobias Estreen	クオンタムブラック(リードデータサイエンティスト)、連続創業者。 ²	エージェント設計、アルゴリズム開発 ²
CTO(最高技術責任者)	Petrus Werner	AWS、クオンタムブラック(5年以上のAIシステムスケール実績)。 ²	インフラ設計、MLOps、システムスケールリング ²

技術的アーキテクチャとエージェント型AIの自律推論メカニズム

Stiltaが提供する製品コンセプトは、特許実務における「Cursor(先進的なAIコードエディタ)」となることである²。特許調査やクレーム検証などの高負荷な業務に対し、静的なレポートを出力するだけで

なく、ユーザーのドキュメントや過去の作業コンテキストを蓄積しながら、インタラクティブに主張を反復・精練できる環境を目指している²。

並列推論エージェントネットワーク

Stiltaの技術的アプローチは、単一のプロンプト処理に依存せず、専門特化された複数のAIエージェントが自律的に連携・推論するアーキテクチャにあるとされる²。実務家が特定の特許番号や分析対象のドキュメントを入力すると、システムは以下のような多角的な探索・検証を自動で行う機能を有している³：

- 非構造化データの並列解析：約1億8,000万件の特許関連資料や約2億5,000万件の学術論文などの膨大な外部データベースをシステムに統合し、先行技術、出願履歴（ファイルラッパ）、訴訟関連記録、ウェブアーカイブなどを横断的に検索する³。ただし、具体的にカバーする国やフルテキスト検索の深度などの仕様については個別確認が必要である。
- クレームチャートの自動生成支援：特許の構成要件（クレームの各項目）と、先行技術や侵害が疑われる他社製品の技術仕様書との間で関連性を解析し、紐付け（証拠マッピング）を行う³。
- 監査可能な引用リンク（**Auditable**）：訴訟やライセンス交渉といった重要局面（High-stakes）での利用を視野に、各分析結果に正確な根拠資料（ソース）や引用箇所を紐付け、検証可能（Auditable）にする設計を採用している²。ただし、最終的な法的判断やその正確性の担保には、依然として弁護士・弁理士ら専門家による確認が必要である。

同社のデモンストレーションによれば、人間の専門家チームが数週間を要するような、1つの特許に対する868件の先行技術（Prior Art）文献の特定および抽出作業を、システムが約30分で処理したとされる³。ただし、これは抽出プロセスのスピードを示すものであり、人間と同等の解釈精度や法的適格性の判定を完全に代替・実証したことを意味するわけではない。

業界のコンテキスト：AIエージェント技術の特許化の潮流

Stilta自身が採用するようなエージェント型AI技術の知的財産権保護のあり方は、業界自体の重要なテーマでもある¹⁰。従来のAI特許は、特定の学習データの構造やニューラルネットワークのアーキテクチャ（モデルそのものの改良）が主な権利化の対象であった¹⁰。しかし、Stiltaを含む現代 of AI エージェントは、既存のLLM（大規模言語モデル）をAPI経由でベースに用いるのが主流であるため、特許化の主戦場は「LLMにどのような手順でタスクを実行させ、どうツール（手足）を自律的に動かすか」というシステム構成や処理フロー、およびハルシネーションを防ぐための独自フィルタリングなどの「制御ロジック」へとシフトしているとされる¹⁰。日本の特許実務においても、情報処理がハードウェア資源を用いて具体的に実現されていればソフトウェア関連発明として「発明」と認められるため、高度なマルチエージェントの協調システムを構築するオーケストレーション技術自体が、権利保護の鍵となる¹⁰。

特許「デッドストック」の活用を志向するビジネスモデル

多くの大企業が保有する特許のうち、実際にライセンスや自社製品に活用されている割合は低く、大半は維持手数料のみを支払い続ける「眠った特許（デッドストック）」になっているとの指摘がある⁶。Stiltaは、生成AI、特許データベース、および訴訟データを密結合させることにより、こうした特許の再発掘から活用可能性の検証支援を自動化・効率化するプラットフォームを目指している⁶。

自社特許ポートフォリオの自動探索、ライセンス候補の抽出、侵害監視、価値評価などの機能につ

いて、Stiltaはこれらを一気に通貫で自動化・支援するプラットフォームを標榜しているが、個々の機能（特に法的な確実性を伴う価値評価やFTO分析など）の実装成熟度や実際の利用範囲については、個別のPoC（概念実証）や導入企業ごとのカスタマイズ状況に依存する可能性があり、注意深い見極めが求められる³。

典型的な運用プロセス：

- 1. 保有ポートフォリオの探索：企業が保有しながら休眠状態にある特許から、再活用余地があるアセットを自動的に探索する⁶。
- 2. 侵害（インフリンジメント）検出：公開されている他社製品や競合の特許出願を監視し、自社特許を侵害している可能性を検知する⁶。
- 3. ライセンス候補先の抽出：侵害が疑われる、または技術的親和性が極めて高い他社企業を特定し、ライセンス供与の交渉材料を整理する⁶。
- 4. 自由実施（FTO：Freedom to Operate）分析支援：自社製品が第三者の有効な特許権に抵触する可能性を評価するFTO分析を効率化し、侵害リスクの評価を支援する³。

こうしたアプローチは、知的財産を単なる防衛コストから、ライセンス収入などを伴う「収益アセット」へと転換させるポテンシャルを秘めており、パテントロール（不実施主体）型の強硬な訴訟モデルに代わる、協調的なライセンス交渉モデルの構築を促す可能性があると期待されている⁶。

同社の公開されたピッチ情報等によれば、現在の売上内訳（ARR比率）は、外部の法律事務所向けが60%、企業内の法務・知財部門向けが40%を占めているとされる⁶。また、同社のピッチ資料等によれば、スイスの製薬大手ロシュ（Roche）やデンマークの海運・物流大手マースク（Maersk）などのエンタープライズ企業が顧客（あるいは検証パートナー）として関与しているとされる⁶。さらに、世界最大の特許法律事務所トップ5のうち3社が、すでに顧客として導入しているか、またはアクティブな実証実験（トライアル）の段階にあるとされる³。

リーガルテックにおける競合分析と市場での優位性

特許関連AIを標榜するプラットフォーム市場は競争が激化している⁶。Stiltaの主要な競合としては、シリーズBラウンドでそれぞれ4,000万ドル（約60億円）の資金を調達したPatlytics（パトリティクス）やSolve Intelligence（ソルブ・インテリジェンス）などが挙げられる³。

競合他社は機能拡張を進めており、例えばSolve Intelligenceは出願ドラフト支援から検索機能、クレーム分析など多角化を進めているため、製品機能は部分的に重なりつつある³。比較の際は各ツールが得意とする「主たるフォーカス領域」を区別することが重要である。

サービス名	資金調達状況・価格帯	主な機能・特徴	ターゲット顧客層	市場ポジショニング	確認時期と主な情報源
Stilta	シード1,050万ドル ⁵	並列推論エージェントによる先行技術探索、クレームチャート、出	法律事務所、企業知財・法務部門 ⁹	特許侵害検出、FTO分析、検証可能なクレームチャート作成支援に特	2026年5月、公式発表・TechCrunch ²

		願履歴等の 統合分析 ³		化 ³	
Patlytics	シリーズB 4,000万ド ル ³	知財ワーク フロー全体 の自動化・ 管理支援 ⁹	大手法律事 務所、企業 知財チーム ⁹	総合的な知 的財産(IP) 管理プラット フォーム ⁹	2026年5 月、業界発 表・ TechCrunch 3
Solve Intelligenc e	シリーズB 4,000万ド ル ³ / サブス クリプション 制(月額約 1,500～ 2,500ドル、 あるいは出 願明細書あ たり約200ド ル～) ¹¹	特許ドラフト (明細書作 成支援)の AI共同編 集、先行技 術探索 ²	弁理士、特 許出願実務 者 ⁹	特許明細 書・クレーム 作成(ドラフ ト作成)に強 みを持つコ パイロット ²	2026年5-6 月、公開価 格サイト・比 較資料 ¹¹
DeepIP	シード・非公 開 ⁹	特許ドラフト 作成支援、 オフィスアク ション対応 ⁹	特許事務 所、企業の 出願チーム ⁹	出願フェー ズのドラフト 作成・拒絶 理由対応に 強みを持つ コパイロット ⁹	2026年5 月、業界レ ポート ⁶
PatentDra wingAI	サブスクリプ ション制(月 額約19～ 399ドル、新 規図面ごと に約2～4ド ルの追加課 金) ¹³	AIによる特 許図面の自 動生成 ¹³	個人発明 家、低予算 の特許事務 所等 ¹³	特許図面(ド ローイング) 作成のみに 特化したセ ルフサービ ス型ツール ¹³	2026年6 月、公開価 格・比較サイ ト ¹³

リーガルAIの投資トレンドとStiltaの成長ロードマップ

投資トレンド:リーガルテックの成熟と「エージェント型AI」への資本集中

2026年時点のリーガルテック投資市場は、単なる初期のバブル期を超え、持続可能かつ実用的な
カテゴリーの確立を競う選択的な投資サイクルへ移行しているとされる¹⁴。投資の特徴として、案件

数は多いものの、大型の調達資金は少数の実績あるプラットフォームに集中する「バーベル構造」が指摘されている¹⁴。

その中で、AIを組み込んだリーガルAIアシスタント分野は、2026年現在でリーガルテック投資資金の多くを占めるデフォルトのカテゴリーとなっている¹⁴。単純なLLMのラッパー型チャットボットではなく、特許データや訴訟履歴といった専門データベースに深く統合されたバーティカルAIエージェントに強い資金流入が見られる¹⁴。

Stiltaが調達した1,050万ドルという規模は、2026年現在のシード投資環境（中央値が約1,000万ドル、平均値が約4,400万ドルとされる）において、適正かつ強力な資本確信（Convictions）を示すものと位置づけられる¹⁴。同時期に調達された他の垂直統合型AI・開発プラットフォーム等と比較しても、Stiltaのポジショニングは明確である¹⁴。

企業名	調達金額・ラウンド	セクター・特徴	主な投資家・実績
Entire	6,000万ドル・シード ¹⁵	デベロッパーツール（AIコーディング用分散Gitネットワーク） ¹⁵	Felicitas Ventures、Jerry Yang、Thomas Dohmke（元GitHub CEO）ら ¹⁵
Gradium	3,000万ドル・シード 拡張（総額1億ドル超） ¹⁵	音声AIプラットフォーム（医療事務、顧客関係など） ¹⁵	Nvidia、Eric Schmidt、Firstmark、Eurazeoなど ¹⁵
Velocity	2,700万ドル・シード ¹⁵	AIマネタイズおよび配信インフラ（アドテック） ¹⁵	NFX、Red Dot Capital Partnersなど ¹⁵
Alta	2,500万ドル・シリーズA ¹⁵	垂直統合型AI・エージェントプラットフォーム（マーケティング、販売等） ¹⁵	IN Venture (Sumitomo Corporation)など ¹⁵
Tangos AI	2,000万ドル・シード ¹⁵	金融犯罪捜査・防止の自動化（バーティカルAI） ¹⁵	Red Dot Capital Partners、Bright Dataなど ¹⁵
Stilta	1,050万ドル・シード [cite: 5, 15]	特許訴訟・知財管理自動化（エージェント型AI） [cite: 3, 6]	Andreessen Horowitz (a16z) 、 Y Combinator など [cite: 2, 3]

組織開発と拡大戦略

Stiltaは調達した資金を活用し、主要な法務・知財市場である米国(ニューヨーク)での事業拡張、およびタレント採用を推進している²。

Y Combinator等の公式採用情報によれば、同社はストックホルムおよびニューヨークにおいて、創業期のコアポジションとして以下の募集を行っている²:

- **Founding Engineer**(ストックホルム): 給与10万ドル~20万ドル、株式0.40%~1.00%(優秀であれば新卒も応募可能)²。
- **Founding GTM**(ストックホルム / ニューヨーク): 給与10万ドル~20万ドル、株式0.40%~0.80%(実務経験3年以上。大企業や法律事務所向けのセールスや事業開発を想定)²。
- **Founding Patent Engineer**(ニューヨーク / スtockホルム): 給与10万ドル~20万ドル、株式0.20%~0.50%(実務経験3年以上。特許実務とAI技術の架け橋を担い、AI出力の法的な正確性を検証・保証する役割)²。

結論

知的財産(IP)を取り巻く法的・経済的リスクが高まる中、Stiltaのエージェント型AIアプローチは、従来の手作業に依存した特許ワークフローをデジタル化し、効率化をもたらす可能性を秘めている¹。世界的なVCやエンタープライズ企業が検証パートナーあるいは顧客として名を連ねている事実は、同社のアプローチに対する業界の一定の関心と期待を示すものである²。

ただし、特許の実務・法的な分析は極めて厳密な正確性を要求されるため、AIエージェントによる検索やドラフト、マッピング結果を盲信することはハルシネーションなどのリスクを伴う²。AIが提示する証拠マッピング(クレームチャート)やFTO分析を実務で完全に機能させるには、依然として人間(弁護士・弁理士)による厳格なレビューと監査が不可欠である。今後、同社が主張する「眠った特許」の再活性化ビジネスモデルが実際にロイヤリティ収入や有意義な合意形成といった具体的成果に結びつか、および競合他社との急速な機能統合競争をいかに勝ち抜くかが、同社の中長期的な成長を測る上での重要なマイルストーンとなる。

引用文献

1. パテサロデイリー【昨日の英語知財ニュース】2026年5月20日号 | パテントサロン - note, <https://note.com/patesalo/n/ne814c0f95c26>
2. Stilta: Agentic AI for intellectual property - Y Combinator, <https://www.ycombinator.com/companies/stilta>
3. A16z backs AI patent startup Stilta in \$10m round - Tech in Asia, <https://www.techinasia.com/news/a16z-backs-ai-patent-startup-stilta-10m>
4. マッキンゼーの同僚4人で起業、「特許訴訟AI」スタートアップが1050万ドル調達したピッチデッキ公開 | Business Insider Japan, <https://www.businessinsider.jp/article/2607stilta-ai-patent-law-legal-ai-seed-round-pitch-deck/>
5. AI駆動の特許スタートアップStilta、1,050万ドルのシードラウンドを発表 <https://t.co/R1jcCJ> | KuCoin, <https://www.kucoin.com/ja/news/community/BTC/6a0ce6fec8707a00078b9516>
6. スティルタ、特許AIで1,000万ドル調達 | 人気の記事 | HyperAI超神経, <https://hyper.ai/ja/stories/01a86068ea415ca264c8422d9221f3ce>
7. Stilta、1050万ドル調達で「企業が忘れた特許」を採掘 AIがデッドストックをアセット化する

る,

<https://acstudio.jp/stilta%E3%80%811050%E4%B8%87%E3%83%89%E3%83%AB%E8%AA%BF%E9%81%94%E3%81%A7%E3%80%8C%E4%BC%81%E6%A5%AD%E3%81%8C%E5%BF%98%E3%82%8C%E3%81%9F%E7%89%B9%E8%A8%B1%E3%80%8D%E3%82%92%E6%8E%A1%E6%8E%98%E2%94%80/>

8. マッキンゼーの元同僚4人が7ヶ月で1050万ドルを調達した「特許訴訟AI」——Stiltaというスタートアップの話 - note, https://note.com/takuma_7676/n/ne600e63a3a21
9. Stilta AI Visibility Score: 31/100 — What AI Thinks | Pendium.ai, <https://pendium.ai/brands/stilta>
10. 【弁理士が徹底解説】AIエージェント技術は特許出願できる？審査基準と権利化のポイント, <https://www.evorix.jp/blog/ai-agent-patent-application>
11. Abigail vs Solve Intelligence (2026): Patent AI Comparison, <https://abigail.app/blog/compare/abigail-vs-solve-intelligence>
12. Solve Intelligence vs &AI: Which tool wins in 2026 | Patentext, <https://patentext.com/blog/solve-intelligence-vs-andai/>
13. PatentDrawingAI vs Solve Intelligence: Pricing & Features (2026), <https://patentdrawingai.com/patentdrawingai-vs-solve-intelligence>
14. Legal Technology Funding Trends (2026) - New Market Pitch, <https://newmarketpitch.com/blogs/news/legaltech-funding-trends>
15. AI app-layer Seed and Series A rounds - Scouts by Yutori, <https://scouts.yutori.com/e9198a79-d3dc-4237-a440-08742d54ff36>